



本泉寺（上菱野城跡） 水無瀬中学校窯跡

せと 歴史と文化財を知る見学会 「山田重忠と山田荘」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団
協力：本泉寺・山田重忠公供養の会・山口郷土資料館・山口八幡社

日時：令和6年5月18日（土）

見学コース： 午後1時 本泉寺駐車場集合・①本泉寺（旧上菱野城跡）境内「正五位山田公碑」現地説明
（予定時間） 1時30分 本泉寺マイクロバス等出発（車窓から「南山城跡」「菱野城跡」ほか説明）
1時40分 水無瀬中学駐車場着・②水無瀬中学校窯跡現地説明
2時20分 水無瀬中学校駐車場発
2時30分 山口八幡社駐車場着・③山口八幡社現地説明
3時 山口八幡社説明終了・解散（本泉寺へ移動）

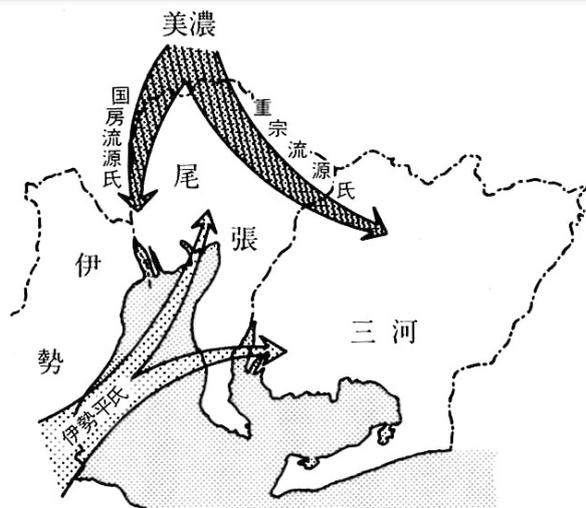
瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきもの生産の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

本地大塚古墳(西本地町2丁目)	古墳	5世紀	飛鳥	須恵器	
宮地古墳群(上之山町2丁目)		6世紀			
	奈良	7世紀	奈良	灰釉陶器	
		8世紀			
	平安	9世紀	平安	山茶碗	
広久手30号窯跡		10世紀			926(延長4) 延喜式神名帳に「尾張国山田郡小口神社」の記載
木造十一面観音菩薩立像(下半田川町) 県 木造阿弥陀如来立像(下半田川町) 県		11世紀			1079(承暦3) 尾張源氏の重宗が摂津源氏の国房と合戦 →合戦後に菱野城築城
12世紀末 水無瀬中学校窯跡操業		12世紀		山茶碗	1180-85(治承4-元暦2) 治承・寿永の乱(源平の争乱)
古瀬戸瓶子(寺本町)	鎌倉	13世紀	鎌倉	古瀬戸	1220(承久2) 山田重忠による山口八幡社勧進(貞応2(1223)竣工)
陶製狛犬(深川町) 国		14世紀			1221(承久3) 承久の乱(山田氏の没落)(承久の乱前に重忠は南山城を居城とする)
瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町) 国	南北朝	15世紀	南北朝	大窯	1247(宝治元) 宝治合戦(三浦一族の滅亡)→泰親・親氏が上下菱野地頭へ
永享年銘梵鐘	室町	16世紀	室町	大窯	1283(弘安6) 瀬戸(元上菱野城主山田泰親(1281出家))が 上菱野城の南に本泉寺創建
聖徳太子絵伝(塩草町)		17世紀			
定光寺本堂(定光寺町) 国	戦国	18世紀	戦国	連房	1548(天文17) 山口八幡社棟札(山田郷八事北迫の氏神造営)
織田信長制札(窯町)		19世紀			1613(慶長18) 本泉寺が旧上菱野城のあった現在地へ移る
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]	安土・桃山	20世紀	安土・桃山	製器	
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(凧山町) 国					
源敬公廟(定光寺町) 国	江戸		江戸	製器	
源敬公廟(定光寺町) 国					
笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)	近代		近代	製器	
石造地藏菩薩立像(片草町)					
陶質十六羅漢塑像(寺本町)	(明治) (大正) (昭和)		(明治) (大正) (昭和)	製器	
六角陶碑(藤四郎町)					1934(昭和9) 「正五位山田公碑」建立(1922に碑文撰)
旧山繁商店(仲切町・深川町) 国登					
瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町) 国登					
陶製梵鐘(深川町)					

源氏的美濃尾張三河への進出と山田荘



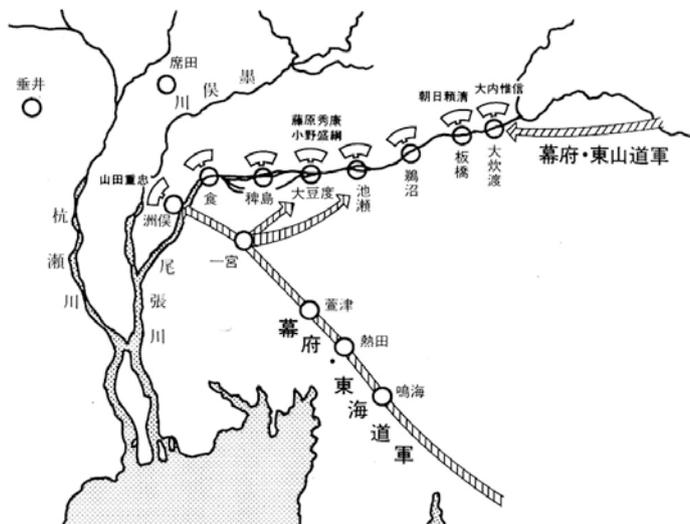
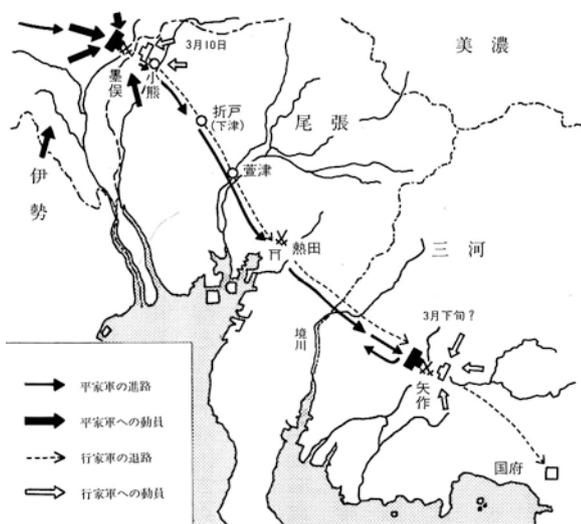
源平両氏の尾張進出

(青山幹哉 1998「平安末期の在地勢力」『新修名古屋市史』より)



尾張の在地勢力図

(青山幹哉・松島周一 2018「院政期の尾張・三河の動向」『愛知県史通史編2』より)



墨俣合戦関係図(左) 尾張川の合戦関係図(右)

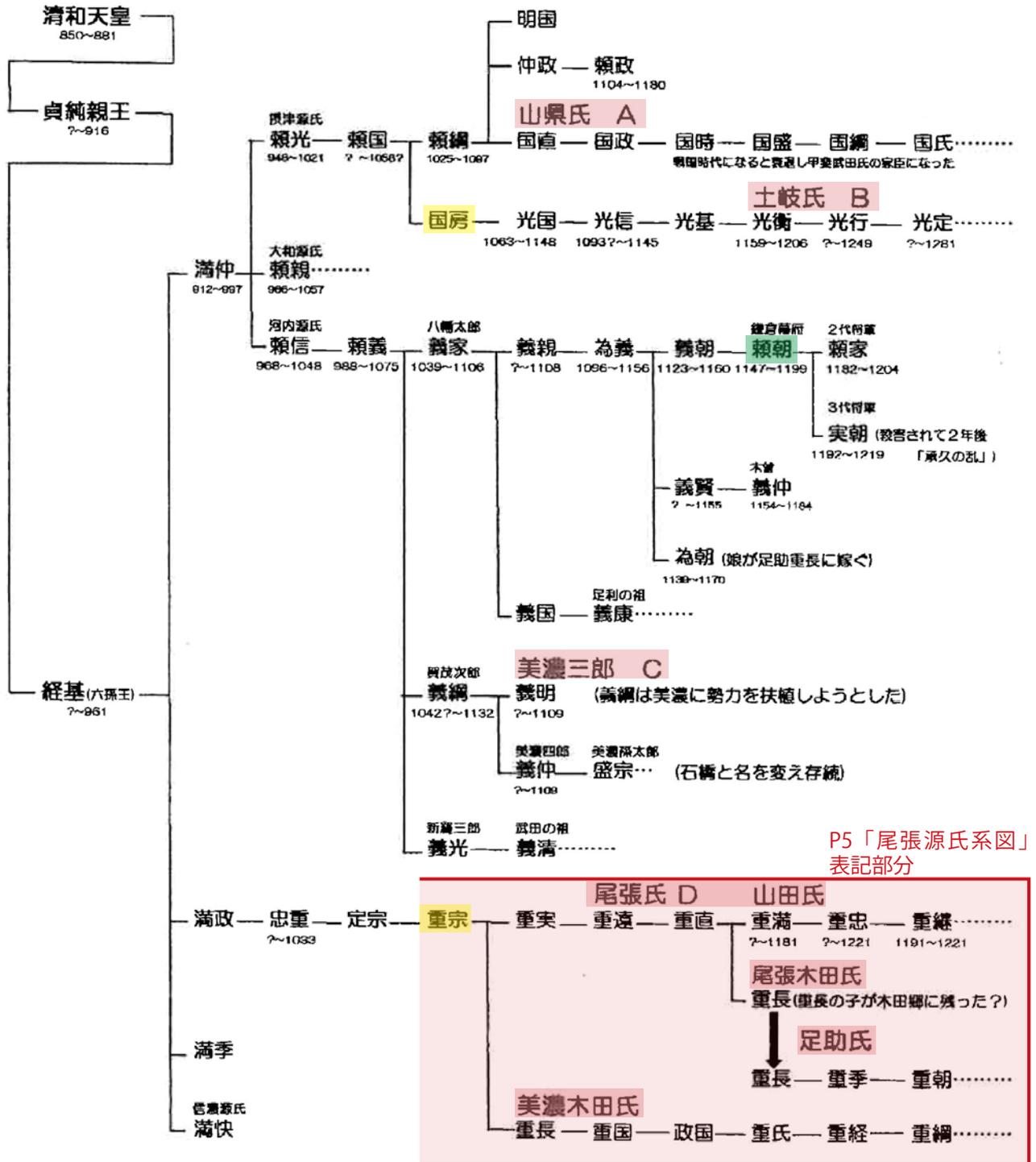
(青山幹哉 1998「平安末期の在地勢力」『新修名古屋市史』より)

山田氏は、清和天皇の末裔の源氏(清和源氏)の一族である。鎌倉幕府を開いた源頼朝は、源満仲の末裔が美濃をはじめ東海に進出する中で伊豆へ配流された後に東国で挙兵した。満仲弟の満政の末裔も美濃・尾張・三河に進出し、山田・木田・足助氏が成立した。

満政ひ孫の重宗は、承暦3(1079)年に美濃多気郡で河内源氏の源国房と合戦に及び、「尊卑文脈」には朝廷から罷免され、重宗やその子孫は美濃・尾張等に土着し、在庁官人のような国衙との結びつきにより国内の武士や郎党を配下に従えていったものと考えられる。

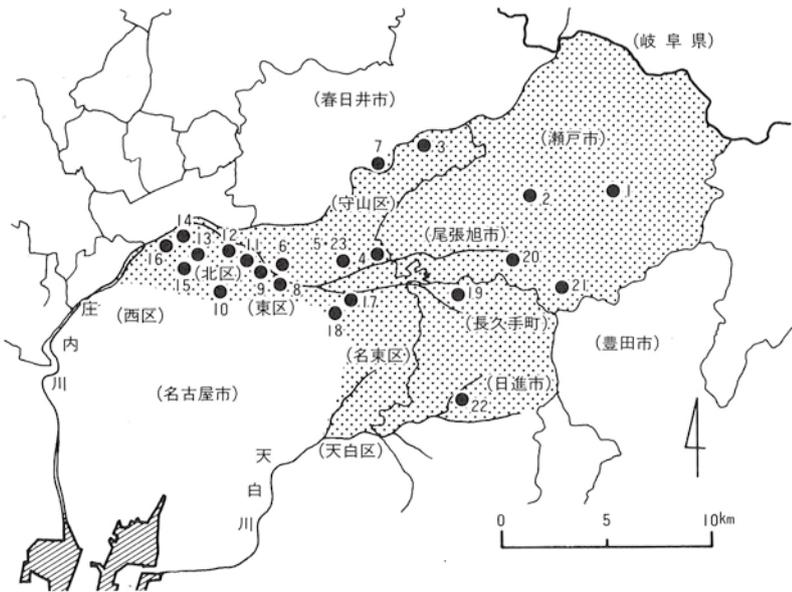
重遠の孫、重満は「治承・寿永の乱」で源行家に加勢し、「墨俣川の戦い」で敗死。行家の娘を妻としていた重満の子重忠は、父の死後木曾義仲軍に加わり、その死後は源頼朝に従い、山田荘の地頭となり、鎌倉幕府御家人となった。ただ、山田一族は朝廷とのつながりが深く、承久3(1221)年の「承久の乱」では京方の猛将として奮戦するも、息子の重継とともに自害に追い込まれた。その後、重忠の孫・ひ孫の代に地域の地頭職等に復活し、末裔は地域社会に溶け込む者、あるいは鎌倉幕府・室町幕府に出仕する者様々であった。

美濃に進出した清和源氏の略系図



P5「尾張源氏系図」
表記部分

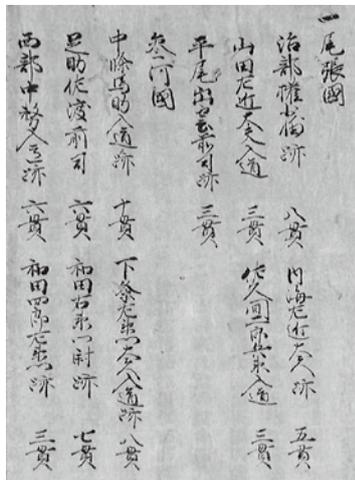
- 山県氏 戦国時代になると衰退し甲斐武田氏の家臣になった人がある
- 土岐氏 末裔に沼田藩土岐氏(35,000)がいる
- 山田氏 戦国時代に岡田に名を変え、旗本嫡斐陣屋岡田氏(5,300石)がいる
- 足助氏 鎌倉時代に衰退した。末裔に犬山藩成瀬氏(35,000石)がいる
- 尾張木田氏 重長の子が木田郷に残り、木田を名乗り、後に帰農した
- 美濃木田氏 戦国時代に美濃を離れ関西に移動し帰農後、商人となった人、美濃に残り帰農し、いつ頃から山田に姓を変えた人たちがいる



No.	古代・中世地名	現在地推定	年代・典拠
1	飽津保内白坂雲興寺	瀬戸市白坂町	永享2 雲興寺文書
2	瀬戸村	瀬戸市深川町辺り	永享10 深川神社鐘銘
3	志田見郷(山田荘)	守山区上・中・下志段味辺り	治承4 水野家文書
4	大森郷(正宗庵)	守山区大森辺り	~天文3 法輪寺大般若經奥書
5	狩津荘内山脇	守山区小幡辺り	文和3 長母寺文書
6	秦江郷(山田荘)	守山区守山辺り	貞治4 名古屋市博物館所蔵文書
7	野田村	春日井市熊野町辺り	建武4 守部文書
8	上野郷	東区鍋屋上野町辺り	大永2 島田吾一氏蔵鯛口銘
9	長母寺	東区矢田町	文永8 宝生院蔵二教論鈔奥書
10	曾栴里	北区大曾根辺りカ	康治2 安楽寿院文書
11	山田郷	北区山田町辺りカ	天平勝宝5 丹裏文書
12	上飯田郷(山田荘)	北区上飯田町辺り	元龜3 熱田神宮寺鐘銘
13	志賀郷	北区志賀町辺り	大永7 安楽寺六地藏石仏銘
14	稲生荘内光音寺	北区光音寺町辺り	応仁文明ころ「梅花無尽蔵」
15	田幡郷(山田荘)	北区田幡1・2丁目辺り	応安5 宝生院蔵釈論解鈔奥書
16	稲生郷(山田荘)	西区稲生町辺り	貞治4 名古屋市博物館所蔵文書
17	猪子石郷(山田荘)	名東区猪子石辺り	貞治4 名古屋市博物館所蔵文書
18	蓬迫	名東区よもぎ台辺り	貞治4 名古屋市博物館所蔵文書
19	石作郷	愛知郡長久手町岩作辺りカ	天平勝宝2 正倉院文書
20	八事北迫菱野村	瀬戸市菱野町辺り	天文17 菱野熊野神社棟札
21	八事北迫山口村	瀬戸市山口町辺り	天文17 山口八幡神社棟札
22	八事北口岩崎郷	日進市岩崎町辺り	天文17 白山宮棟札
23	小幡長谷村(山田荘)	守山区小幡辺り	元龜1 勝軍地藏堂鯛口銘

(注) ① No.は、図1-10のNo.と対応する。
 ② No.12・23は資料に春日井郡または春日郡とされているが、「山田荘」とあることから、分割以前は山田郡内とみた。
 ③ 表以外に、森網郷・狩越郷・炭焼迫・東三条・小松江保などが中世地名として確認できるが、現在地の比定困難なため省いた。

山田郡域の推定図(上図) 山田郡関係の古代・中世地名(下表)
 (上村喜久子1998「郡の改廃と変質」『新修名古屋市史』より)



六条八幡宮再建費用を分担した「建治帳」の尾張・三河の箇所
 (国立歴史民俗博物館蔵 1275(建治)年 青山幹哉・渡邊正男2018「尾張・三河の在地勢力」『愛知県史 通史編2』より)

長慶寺祠堂記・山田世譜 ↑
 (長慶寺資料 瀬戸市史編纂委員会 2005 『瀬戸市史 資料編3』より部分抜粋)

重儀 称和泉太郎、正六位下左衛門、
 初名重忠、称山田二郎、食山田莊、
 寿永二年癸卯八月十日叙従六位下任右兵衛少尉、承久三年癸巳
 夏、順德上皇微命到京、五月十一日叙従五位下、任左衛門大尉兼大和
 守、六月日於美濃津瀬川力戦、八日叙従四位下、任右兵衛佐、應昇殿、
 十二月日於近江瀬田会戦、十五日於山城嵯峨自殺、年五十六、法名宗
 圓、字道叔、号建正寺。
 明長 従六位下右馬大允、
 文永元年甲子、於春日郡勝川村、造瑞雲山地藏寺、以末子道澄
 為開祖、同三年丙寅二月十一日死、年八十七、法名泰岳、字道隆、

重經 孫一郎、従五位下伊豆守、
 承久癸巳變為官軍有功、父自殺時防敵苦戰被重刀、且中口傷石
 股、以故為伴被殺、時六月廿五日、年三十一、法名玄圃、字道門、
 号長父寺、
 母、新宮備前守源行家女子、
 孫三郎為叔父明長子、
 朋友 中島右衛門大尉大中臣宣長妻、
 女子

兼經 又太郎、正六位下頭、
 承久三年癸巳秋坐父之罪謫居後、時年十四、居七年值散還旧里乃
 為備津保山入道、法名安心、道号道意、寛元二年甲辰十一月二日
 死、年三十七、号長兄寺、弟正親為兄兼經追福、於山田莊小幡村建
 長兄寺、安業經神主、
 正親 初名重親、称山田二郎、食山田莊、
 従五位下左近衛將監、後嵯峨上皇北面、曾為長父長母長兄之
 三寺、為父母兄冥福、弘安三年庚辰二月一日卒、年七十一、法名英
 貞、字一俊、号等覚寺、
 母、讚岐守藤原清資女子名資子、叙従五位下、任掌侍、建長元年
 己酉八月十五日卒、年五十五、法名純鏡、字天宗、号長母寺、
 蓮仁 号常山、称山田禪師、

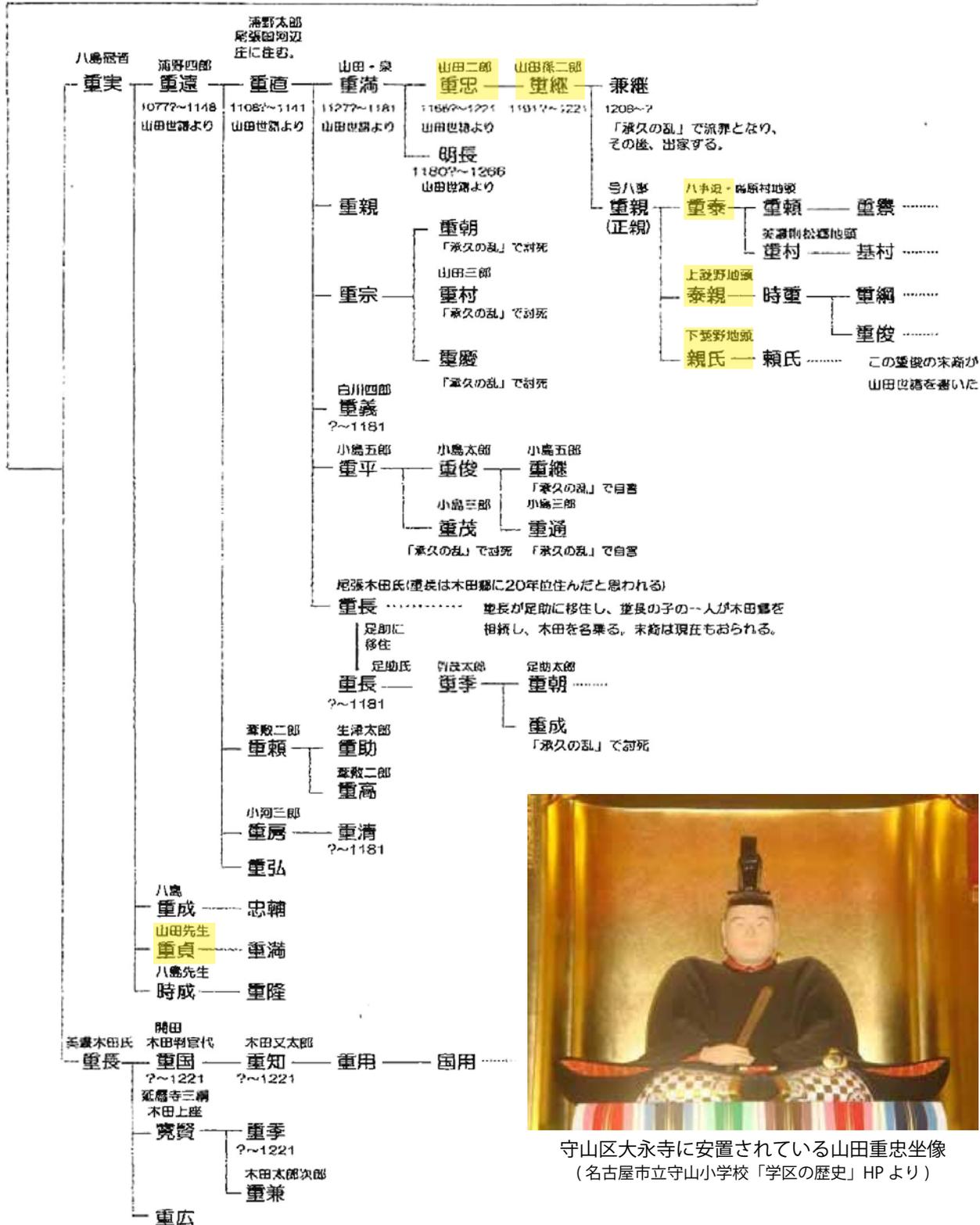
重説 称山田太郎、藏人信濃守正五位下、
 後深仲上皇、為北面藤原殿、
 母、中島右衛門大尉宣長女、
 重泰 称山田二郎、法名道西、号法光寺、
 事鎌倉大将軍、
 泰親 称山田三郎、事大将軍惟康親王、
 為山田莊上野野名山口、地頭、然宗間叙社年而讓地頭于長子
 重元園居焉、弘安三年辛巳為大僧都教順上人修野高野、之弟子、
 剃髮改名浄顯、六年癸未於上野野村造教春山本泉寺、自為開祖、嘉
 元二年甲辰二月廿一日卒、年六十七、娶鳴海余一源清時女子生四
 男、第二日重吉、称三郎太郎、年十八而死、第二日重利、称三郎二
 郎又先死、第三日重元、称又三郎、為上野野地頭、第四日時重、称
 三郎四郎、為重説子、
 親通 稚少僧都、
 親氏 称山田四郎、
 下野野地頭、
 女子 愛知修理亮源保義母、

尾張源氏系図

「尊卑分脈」より作成、一部「瀬戸市史・資料編3」の山田世譜(長慶寺資料)

山田世譜は山田氏の末裔・山田正修仲治が明和8年(1788)にまとめたもの。仲治は名古屋の商人出身の学者。

清和天皇 850~881 — 貞純親王 ?~916 — 経基(六孫王) ?~961 — 満政 — 忠重 ?~1033 — 定宗 — 重宗 ?~1079



守山区大永寺に安置されている山田重忠坐像 (名古屋市立守山小学校「学区の歴史」HPより)

(小林鑛一 2023『美濃・尾張源氏 - 誕生から終焉まで -』より引用・一部加筆)

① 本泉寺・山口(上菱野)城跡

現在真宗高田派本泉寺^{ほんせん}の境内となっている区画は、山口城があった場所である。南側には土塁や堀跡の池も一部残る。中世の山口地区は上菱野ともいい上菱野城跡とも呼ばれる。

平安時代後葉から山田郡域に勢力をもった山田氏^{しげただ}は、山田重忠が当主であった頃、承久の乱(承久3(1221)年)で京方(後鳥羽上皇方)の猛将として奮戦したが、戦いに敗れ、重忠は嫡子の重継^{しげつぐ}とともに京都嵯峨にて自害し、山田氏は一旦没落した。

その後山田泰親^{やすちか}が上菱野、泰親の弟の山田親氏^{ちかうじ}が下菱野の地頭職にそれぞれ任じられ城主となった。寺伝では、泰親は弘安4(1281)年^{じょうけん}に出家し瀨頭と名乗り、弘安6(1283)年に城の南に本泉寺を建てたが、慶長18(1613)年に水害により、寺を現在地へ移転したとされる。

公姓源山田氏諱重忠後改重広称二郎鎮守府將軍源滿政之裔重滿第二子也勇武有材幹待物寛恕為時所称寿永二年從源行家与平知盛戰於播磨不克而帰和泉承久之役公属王師奮戰於洲股敗而還又率延曆寺僧兵二千餘騎赴勢多既而王師敗績引兵而還後鳥羽上皇戒門者不納曰任汝所之乃馳入嵯峨自殺或曰逃至山科後徒尾張為山田莊上菱野地頭以寿終焉大正六年贈正五位其曾孫泰親薙髮改名瀨頭是為本泉寺之開基寺中有公墳焉頃者寺主良善師來請曰公之事績世鮮知者恐湮滅於無聞子為吾記之吾將勒之石余嘉其志叙其梗概如此大正十一年壬戌十二月下条雅撰重忠公碑曩昔先考發願之建設請下条先生既得撰文而碑未成荏苒經十餘歲其間先考既没先生亦成白玉樓中之人矣然頃日機縁純熟当村冒山田姓者数氏為建碑完成尽瘁村内同族者又協贊戮力遂成就年来宿望訖庶幾長顕彰祖考之名以擬報恩之万一哉

昭和九年九月 本泉寺第廿三世住持職良玄識之 大津重良書之

「正五位山田公碑」銘文
(村瀬一郎 1991『瀬戸の文学』より)



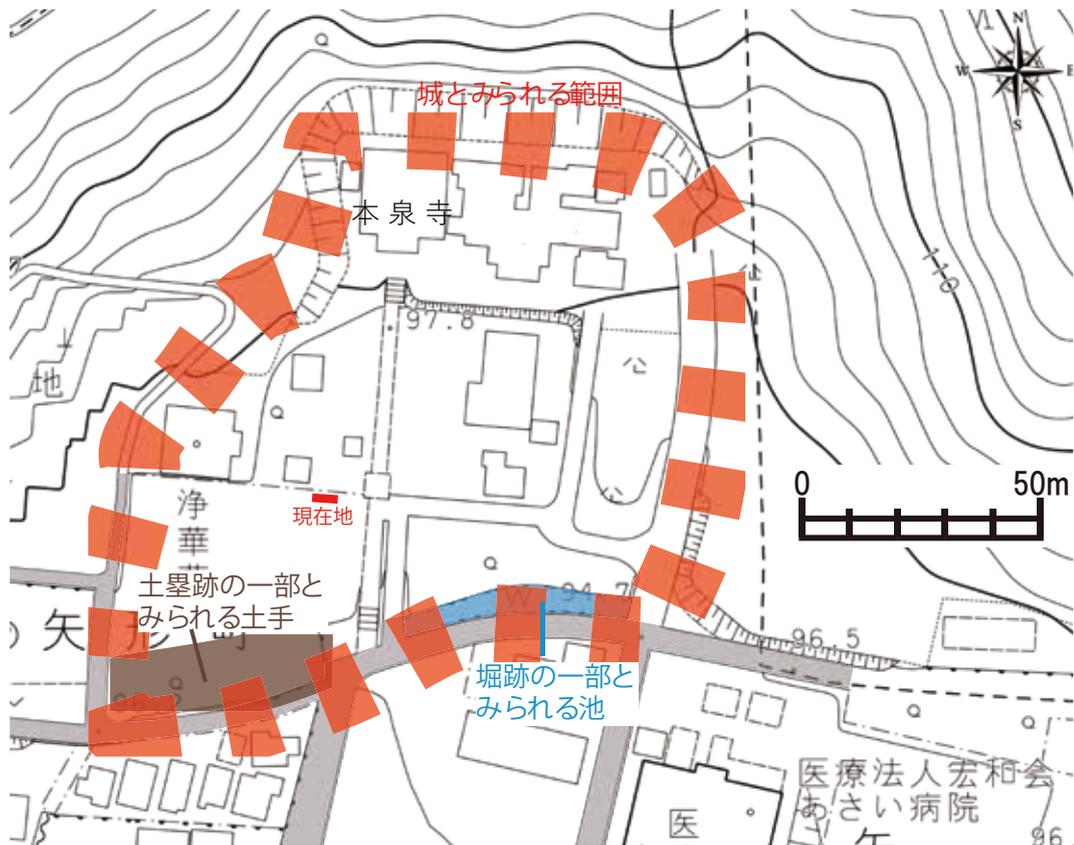
山田氏関連地位置図

解釈文

公の姓は源、氏は山田、名は重忠、後に重広と改め、二郎といった。鎮守府將軍だった源満政の子孫である重満の次男である。武勇にすぐれ才能があり、人に接して心が広く思いやりがあり、時の人たちにたたえられた。寿永二年（一一八三年）源行家に従って平知盛と播磨で戦い勝てず、そして和泉に帰った。承久の役には朝廷の軍に従い洲股で大いに戦った。負けて帰りまた延暦寺の僧兵二千人余りを引き連れ勢多に向った。それまでに朝廷軍は大敗しており兵をひき返した。後羽上皇は怒り宮門を守る者に命じて入れさせなかった。そして言うのには「お前の行きたい所に行け。」と。そこで馬を走らせ嵯峨に行つて自殺した。またこんなにもいう「逃れて山科に行きその後尾張に出向き、山田の荘の上菱野の地頭となり長寿で亡くなった。」と。大正六年に正五位のくわいを贈られた。その孫の子の泰親は髪をそって仏門に入り名を漸頭とあらためた。この方が本泉寺を建て開いた。寺の中に公の墓がある。近頃寺の主の良善師がやって来て頼んで言うのには、「公の業績を世間で知っている者が少ない。たぶん世間に知られないまま滅びてしまうだろう。あなたは私のために公の事を書いて下さい。私はこれからこの事を石に彫りつけよう。」と。私はその心持ちをほめて事のあらましをこの様に書いた。

重忠公の碑は先頃、亡くなった父が建設することを願望し、下条先生に頼んで以前に碑文を作って貰ってあったが碑はまだ出来ず、のびのびになって十余年がたった。その間に父が亡くなり先生もあの世の人となった。だが此の頃機会が丁度出来てこの村で山田の姓を名乗る者が数人で碑を建てる事の完成に心を尽くして努力し、村内の同族の者も賛成し協力して、ついに長年の願望を達成した。どうか永久に祖先の名をあらわして恩徳の万分之一にも報いたいと思うのである。

「正五位山田公碑」解釈文
(村瀬一郎 1991『瀬戸の文学』より)



本泉寺境内に残る山口城の堀・土塁

② 水無瀬中学校窯跡

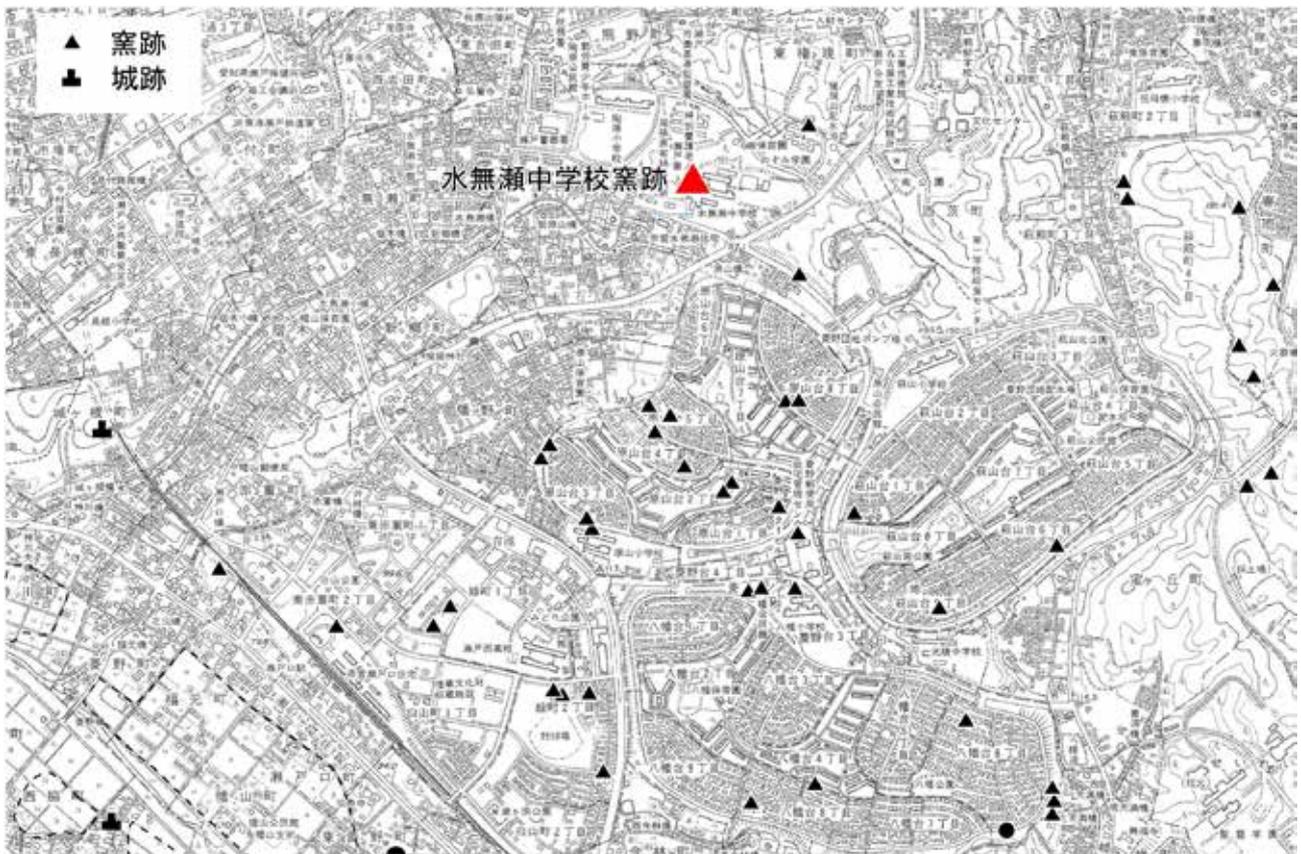
水無瀬中学校窯跡は、瀬戸市立水無瀬中学校の校地西側にある丘陵の、南東向き斜面に立地する。この窯では鎌倉時代初頭に「古瀬戸」と呼ばれる釉薬を施した焼き物を生産していた。

「古瀬戸」は、中世の日本で唯一の国産高級施釉陶器であり、有力武士など位の高い人々から「威信財」として求められた。その「古瀬戸」の生産開始は12世紀末葉と言われており、まさに本窯は、古瀬戸が開発された当初の工人集団によって操業されていたことになる。

本窯が所在する原山町の南側は、現在は菱野団地となっているが、かつては丘陵地であり、下図のように数多くの窯跡が存在していた。昭和40年代の団地開発工事に伴い、これらの窯跡は全て滅失してしまったが、事前に発掘調査が実施され、記録保存されている。その結果、これらの窯跡は、水無瀬中学校窯跡と同時代にやはり古瀬戸



菱野団地造成前の丘陵地



水無瀬中学校窯跡位置図

を生産していたことがわかっている。言い換えれば菱野団地周辺は、古瀬戸生産の黎明期を支えた地域でもあったと言えよう。一方、本窯は滅失を免れて現在に至っており、この時期に操業した窯跡として貴重な窯跡となっている。

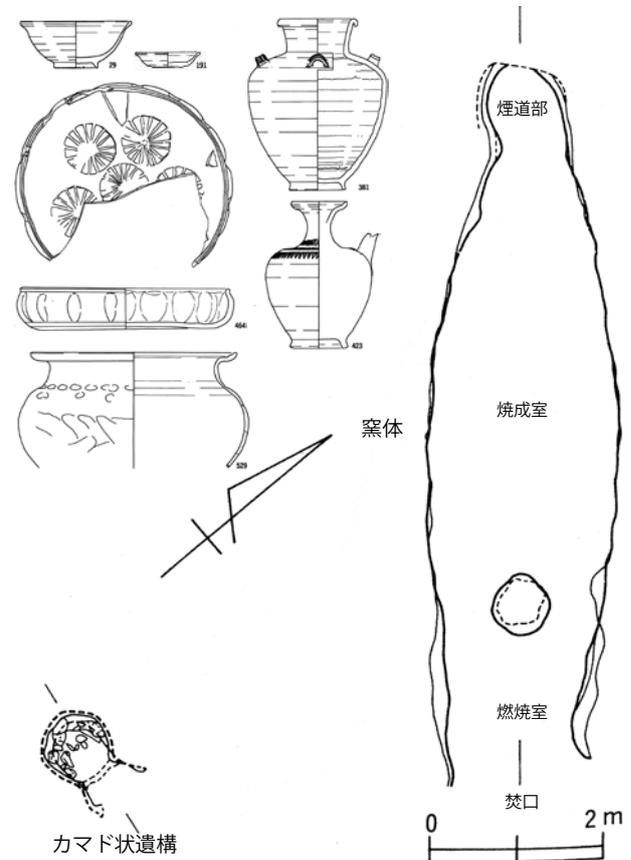
本窯跡については瀬戸市史編纂に伴う学術調査が昭和47・48年に行われ、窯体と灰原（灰や失敗した製品の捨て場）、さらにカマド状遺構が検出されている。

窯体は当時の瀬戸において普遍的に使用されていた「^{あながま}窖窯」と呼ばれるもので、丘陵斜面をトンネル状に掘りぬいた単純な構造で、手前から薪を燃やす燃焼室、製品を焼くための焼成室、煙り出しである煙道部で構成されている。窯体の全長は約8m、最大幅は約2m、焼成室の床面傾斜は24°で、天井は落ちてなくなっているが、焚口から煙道部まで良好な状態で遺存している。

カマド状遺構は窯体に向かって左脇で検出された。平面形はほぼ円形で、水平に造成された床面の奥行は0.9mを測る。何のために使用されていたかは明らかではないが、発掘調査時、埋土には陶片が全体に詰

まっていたとされている。

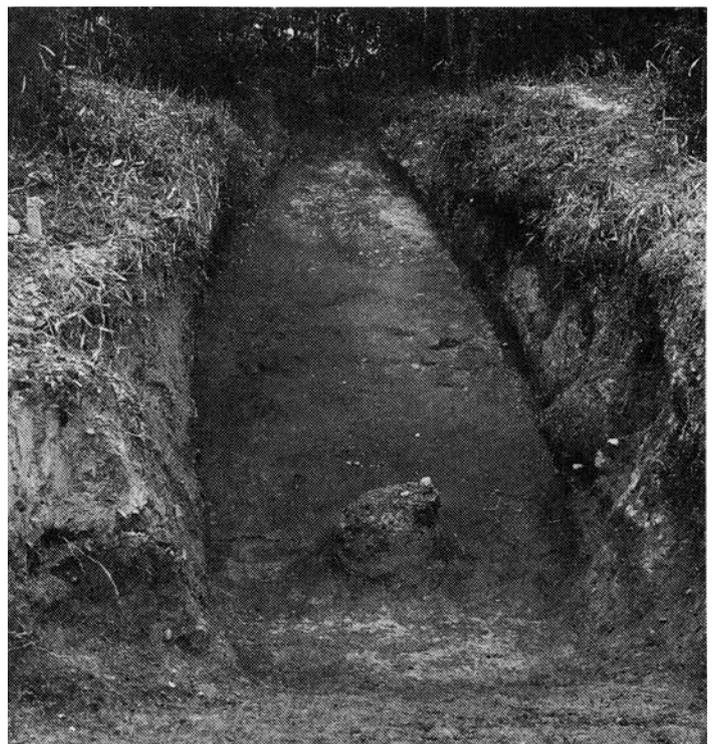
窯体の斜面下方には灰原が広がる。部分的な調査が行われたのみであるため、その範囲は明らかにされていないが、現在も窯体の前に残されていると思われる。



窯体及びカマド状遺構実測図

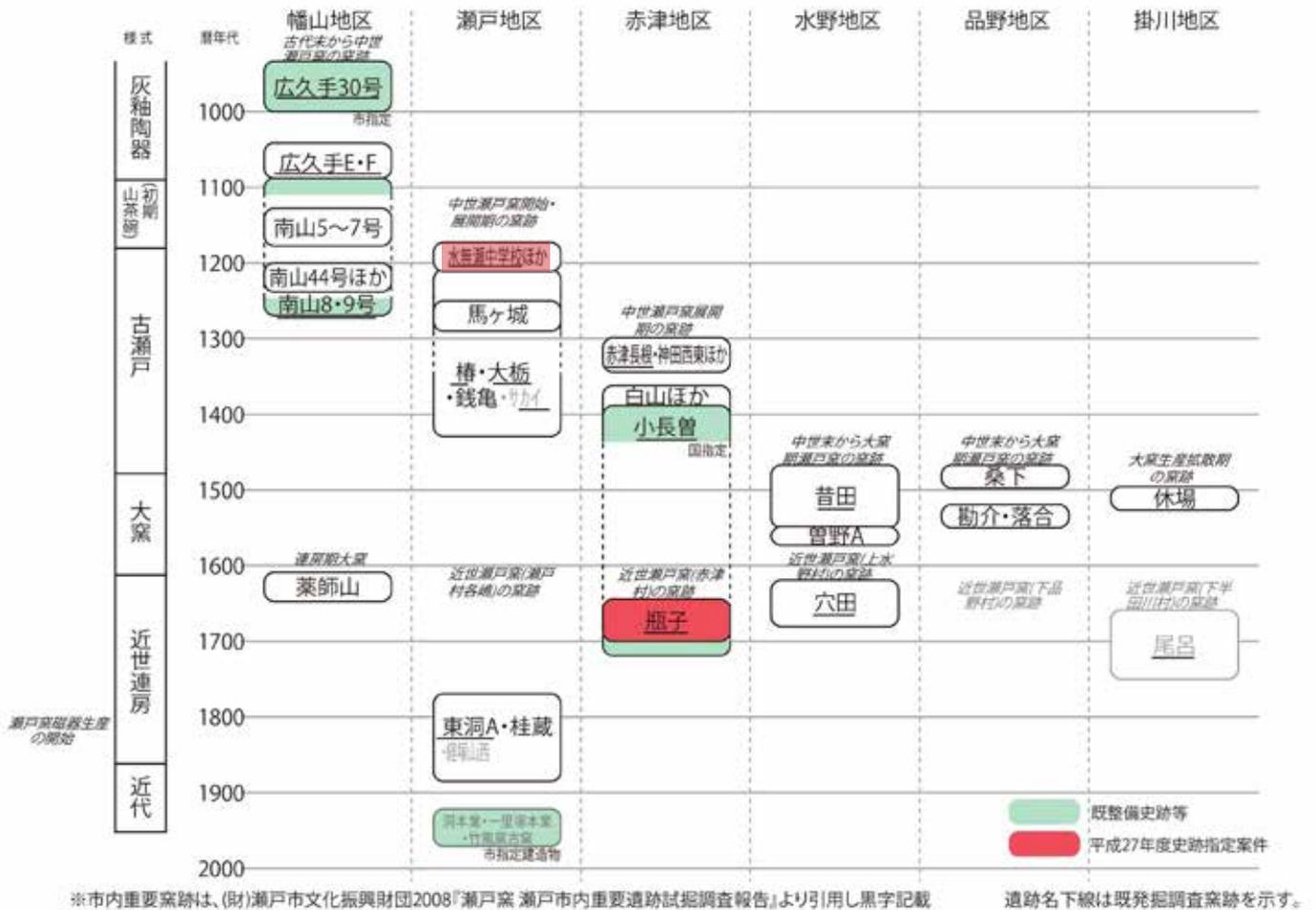


カマド状遺構全景



窯体全景

瀬戸市内重要窯跡等 時期・地区別一覧



見学地周辺の山田氏関連城館跡

菱野城跡

承暦3(1079)年の山田重貞(重定)が、源国房との争乱後に屋敷を築いたものと伝えられる。弘安年間(1278-88)には、山田親氏が下菱野の地頭となっており、菱野城に居住したものと推定される。

室町期には、永正14(1517)年林雅光をはじめ織田信長家臣の林氏が居城としたとされる。

南山城跡

『古由来万書記覚』に「城坂の上にかまへ跡あり、山の上四方堀越、かしがきを付置、今跡あり、山田伊豆守この中に屋敷二十四間構に居住なり大川つきあて崩れ、南山薬師西、欠の上に殿を造り。」とあり、重忠嫡子重継の居城と記載されている。①御鍛神社跡②富士浅間社③宮地町の3か所が候補地として検討されている。



[大字・町丁目:「大字・町丁目レベル位置参照情報(平成23年) 国土交通省」より作成]

③ 山口八幡社

山口八幡社の社地は、古くは山口神社と言われ、延長4(926)年編纂の延喜式神名帳には「尾張国山田郡小口神社」と記載され、本国神名帳の山田郡の条にも「従三位小口天神」と記されている。江戸中期に成立した『張州府志』にも式内社として「在山口村」と記載され、江戸後期の『尾張志』にも記されるように、これは「山口」を「小口」と誤写したものとみられる。神社には、山口天神由来の「牛石」と呼ばれる巨石が境内参道(現在は西側の尾根上に移動された)にあるが、境内に複数基ある古墳の横穴式石室の一部とみられる。

承久2(1220)年に山田重忠が当地に八幡社を勧進し、社殿の造営を始め、貞応2(1223)年9月15日に竣工するとともに、すでにあった山口神社を合祀したとされている。

祭神は、神功皇后、応神天皇、多紀理比売命、市寸島比売命、田寸津比売命とされ

る。

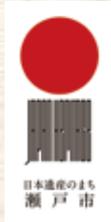
社殿の棟札で残されている最古のものは、天文17(1548)年に「奉造宮当社御氏神之事」として「尾張国山田之■八事北迫山口村」の「伊藤源七良助宗」「衞門秋広」「水野九■衛門秋広」が願主として記載されたものである。

江戸時代には、尾張東部から三河北西部の村々が猿投神社に献馬奉納する猿投神社祭礼が盛んにおこなわれたが、山口八幡社の存する山口村はその北尾張合属(合宿)のとりまとめ役である首村でもあった。明治期に至り、山口八幡社は郷社に格付けられ、山口・菱野・本地村の幡山地区および上郷・前熊・大草村の現長久手市北東部の村々の総社となった。今日伝えられる郷社祭りは、毎年秋の各村の例大祭とは別に、猿投神社祭礼さながらに、山口八幡社に郷社に連なる6か村からの献馬が大きな慶事があつた際に行われている。



『尾張名所図会』に描かれた本泉寺・山口八幡社ほか

瀬戸市歴史文化基本構想を推進するため、
瀬戸市の各地区から
歴史文化に詳しい市民が参加して
ワークショップを行い、
「瀬戸」の重要な文化遺産のものがたりを
4つ選び出しました。



本事業は、平成31年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業(文化芸術振興費補助金)を活用して実施しています。

お問い合わせ

瀬戸市歴史文化基本構想を活用した観光拠点形成のための協議会

0561-84-1093

[瀬戸市地域振興部文化課]

せともの

せともの魅力は「せともの」だけじゃない?
市民が推す四つのせとものがたり



新時代のツクリテは
何処に?

せとものがたり 1

尾張・三河・美濃
三国の
交わる場所



せとものがたり 2



美しい自然に
親しむ



せとものがたり 3

マメ女匠

祭りと伝承



せとものがたり 4



物がたりの舞台を巡りながら、
せともの魅力を再発見してみよう!
新開設!「せとものがたり」はコチラから